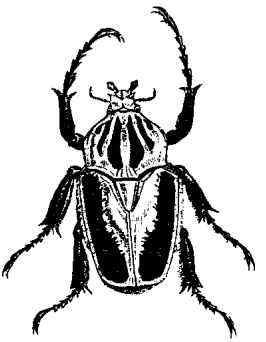
真ク・リトル・リトル神話大系 3

Tales of Cthulhu Mythos at Last

那智史郎 編　バベル翻訳会 訳

国書刊行会

那智史郎
1949年長崎県生。
1972年西南学院大学文学部卒。
怪奇小説、怪奇映画の研究を趣味となす。
現在、福岡県在住。



真ク・リトル・リトル神話大系　第3巻

昭和57年12月10日印刷
昭和58年3月20日第2刷発行
2,900円——定価
セイユウ写真印刷株式会社——印刷
大口製本印刷株式会社——製本

著者——H・P・ラヴクラフト 他
編集——那智史郎
発行者——佐藤今朝夫
制作・松井克弘＋井口倫太郎
発行所——株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨3－5－18　郵便番号170
電話　03—917—8287　振替東京5—65209

落丁本・乱丁本はおとりかえします

ラヴクラフト『異次元の色彩』の映画版ロビーカード(左)。同じくベルギー版のポスター(下)。右上はダーレスが嘆いた『ダニッチの怪』のロビーカード。

『チャールズ・ウォードの奇怪な事件』の映画化。なぜかポー原作になっている。
邦題は『怪談・呪いの霊魂』(!!) 題名には関係なく傑作との噂しきり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

Contents

魔界へのかけ橋　H・P・ラヴクラフト……7
魔道師の挽歌　C・A・スミス……37
闇に潜む顎（あぎと）　R・E・ハワード……63
触手　ヘンリー・カットナー……93
セベックの秘密　ロバート・ブロック……121
暗黒星の陥穽　J・ラムゼイ・キャンベル……149
妖蛆の館　ゲーリー・メイヤース……171
大いなる帰還　ブライアン・ラムレイ……185
第七の呪文　J・P・ブレナン……207
メデューサの呪い　Z・ビショップ……217
断章　H・P・ラヴクラフト……271
解説――那智史郎……281
資料編――阿部正記編……i

The Horror from the Middle Span *H. P. Lovecraft & A. Derleth* ····· 7

The Door to Saturn *C. A. Smith* ····· 37

Usurp the Night *R. E. Howard* ····· 63

The Invaders *H. Kuttner* ····· 93

Secret of Sebek *R. Bloch* ····· 121

The Mine on Yuggoth *R. Campbell* ····· 149

The House of the Worm *Gary Myers* ····· 171

The Sister City *B. Lumley* ····· 185

The Seventh Incantation *J. P. Brennan* ····· 207

Medusa's Coil *Z. Bishop* ····· 217

Fragments *H. P. Lovecraft* ····· 271

本文イラストレーション——権泰年 8, 38, 64, 94, 122, 150, 172, 186, 208, 272 坂上知之 218

ブックデザイン——神田昭夫

魔界へのかけ橋

The Horror from the Middle Span

H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス　片岡しのぶ　訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

アンブローズ・ビショップの手記が彼の失踪事件を調査中の当局の手によって発見された。手記は空瓶に封じ込められていたが、明らかに、炎上中の家から、裏の林の中に投げ込まれたものであった。マサチューセッツ州、アーカムの保安官事務所に今も保管されている。

ロンドンを出発して七日目に、私は、祖先が二世紀の昔イギリスからやって来たアメリカの土地に到着した。マサチューセッツ州はダニッチの北、ミスカトニック川上流の荒涼たるこの土地は、エイルズベリー・パイクと呼ばれており、年古りた樹木が多い。欝蒼たる巨木の樹林が茨を混じえて昼なお暗く大地を覆い、そこかしこにかつては人が住んでいた館の廃墟があるはずなのだが、それも今では陰欝な植物群の下に姿を隠してめったには人目に触れない。エイルズベリーの街道沿いに延々と続く茨のからんだ石壁からさえも、ほど遠い距離にあるこの場所を探し当てられなかったとしても不思議はあるまい。というのは、この家に通ずる小径は今や大小の木々の間に完全に埋没してしまっていたからである。道路わきの石柱の残骸に辛うじて〝ビショップ〟の五文字のうちの四文字が読みとれなかったならば、目的地に着いたともわからなかったに違いない。私の大伯父、セプティマス・ビショップが今からおよそ二十年前——大伯父は当時まだそれほどの歳ではなかった——のある日、この家から忽然と姿を消した。棘だらけの茨の茂みを掻き分け、道に横たわる倒木を踏み越えて、私は家まで半マイルのその小径を登った。

家は、丘を背に、二階建てながら蹲るような形でそこにあった。半分は石造り、半分は木造のこの家は

その昔、白塗りであったものらしいが、長の年月朽ちるがままに放置されて今では白の跡さえとどめていない。一目見た時、私はその家の奇妙なところに気がついた。道すがら眺めて来た半壊あるいは全壊の附近の家々とは違って、この家は石組みから窓枠まで何一つ損われてはいなかった。むろん木造の部分は風化してはいた。とくに丸屋根の部分には木材の腐れが目立ち、そこを亀裂が何本か走っていた。

入口の扉が半開きになっていたが、家の正面に張り出している柱廊付きのヴェランダが、家の内部を雨風から護っていた。一歩なかに踏み入ってみると、埃が分厚く積もってはいたが、何一つ荒された様子はない。椅子一脚持ち出した賊もいなければ、書斎の机に開いたままの本に手を触れた者もいないようだ。ただし、何もかも黴だらけである。窓々を開け放っていかほど風を通そうとも、隅々を洗い立て磨き立てようとも、この温っぽい黴臭さはこびりついて消えないに違いない。

にもかかわらず、私は、大掃除をやることに心を決めた。まずは一たんダニッチへ戻らねばならぬ。そこで、ニューヨークで借りて運転して来た車を本道——と言っても轍のついた小径と言った方がいいようなものだが——で乗り棄てて来たので、そこまで取って返し、ダニッチまでまた車を走らせた。ダニッチは、ミスカトニックの暗い流れと、これまた憂鬱な翳を投げかけるラウンド山とにはさまれて大地にへばりついている薄汚れた寒村である。もとは教会堂であった建物に、食料雑貨商トバイアス・ウェイトリーと看板がかけてある。集落にただ一軒のそのよろず屋へ、私は入って行った。

片田舎の偏屈者には数多くお目にかかってきたが、この店の主のようなのは初めてだった。痩せた髭面の老人が奥から出て来て、注文の品をまずは大体並べてくれたが、受け取って金を払ってしまうまで一言も口を利かなかった。

取り引きが終ってから、主は初めて私の顔を正面から見つめた。

「旅のお人かね？」
「ああ――いや、イギリスから来ましてね。以前この近くに身内のものが住んでたんだ。ビショップって名前だったが……」
「ビショップ……」
店主の声は囁きに変った。
「ビショップと言いなさったか？」
それから、私の預り知らぬあることを確かめるとでもいうように、老人はやや声を高めて訊き直した。
「近所にゃ今もビショップって衆がいるだに。もしや、そっちのご親族じゃねえですかい？」
「いや、おそらく違うでしょう。私の伯父はセプティマス・ビショップと言いましたよ」
その名を聞くや否や、老人の蒼白い頬から一段と血の色が引いた。それから、こともあろうに、私が買い込んだばかりの品物をカウンターから叩き落そうとしたのである。
「やめ給え。金を払ったんだぞ」
「金なら返しますぜ。セプティマス・ビショップの身内とはかかわりたくねえだ」
じいさんの細い腕には力というものが全くなかったから、品物を取り戻すのはわけないことだった。じいさんはカウンターから後じさって、壁の棚にぴたりと背中を押しつけた。「まさか、あの家に行くんじゃあるまい？」
声はまた囁き声である。老いさらばえたその顔に驚愕の色が浮んでいた。
「行ったっていいだろう？」
「ダニッチの衆は誰もあの家に行かぬよ。家の近くにまでさえ行かんわい」

じいさんは激しい口調で言った。
「なぜだ？」
「知りなさらんか？」
「知っていれば訊かないさ。知っているのは私の大伯父が十九年前にあの家から消えたということだけだ。家屋敷の権利を申請しようと思って来たわけですよ。大伯父はどっちにしろもう死んでいるに違いない」
「あん時に死んだだよ」
老人はまたもや聞きとれぬほどの声で囁いた。
「殺されただ」
「殺された？　誰が？」
「あいつらだよ。あのあたりに住んでたやつらだに。あんたの伯父御と身内の衆はあいつらにやられっちまった」
「大伯父は独り暮しだったはずだよ」
私は、馬鹿げたこの田舎老人の臆病風にうんざりし始めた。この老人は明らかに私の大伯父のことを何も知らないのだ。わけもなく死人を怖がるなど、無知文盲の人間にはありがちなことである。おそらくはセプティマス大伯父にしろ、同じような男であっただろう。
ウェイトリー老人は、口の中で何やら呟きはじめた。
「……夜にな……埋めただ……もう一人は生き埋めにしただ……呪いが……やつらの家はつぶれた……みんな次つぎと死んで…」
この有難くない台詞を聞き流して、私はさっさと店を出た。ほかに必要なものはアーカムで買うことに

心を決める。だが、ウェイトリー老人の言葉が気にならないでもなかった。結局、私はアーカムまで車を飛ばし、一束の〈アーカム・アドバタイザー〉を借り出す仕儀となった。だがこの思いつきは大して成果を収めなかった。六カ月分全部をひっくり返してみたが、ダニッチ発となっている記事は二つしかなく、大伯父に関するものはそのまた一つであった。

セプティマス・ビショップ氏は依然行方不明である。氏は十日前、ダニッチ北部の自宅から姿を消した。独身で、世を捨てた生活をしていた氏のことを、ダニッチ村の人びとはさまざまに噂し、人によっては、心霊治癒師、魔術師などと呼ぶ者もあり、かなり迷信的な取り沙汰をされた人物である。背が高く、痩せており、失踪当時五十七歳。

ダニッチ関係のもう一つの記事は、微笑を誘うたぐいのもので、ミスカトニック川のダニッチ上流にかかっている古い橋の橋脚が何者かの手で補強されていた（郡当局はそのような修理を行なった事実はないと強硬に否定しているから、おそらく集落の誰かの仕業だろう）ことをめぐって、今はもう誰も使っていないそんな橋を修繕するとは怪しからぬ、との批判が集中した、というものであった。

ふたたび車を駆って、ダニッチへ、またその先へと来た道を戻る道すがら、私はもの想いにふけった。ウェイトリー老人はあんなことを言っていたが、それというのも村人たちの間に妙な迷信が蔓っているからに相違ない。じいさんはみんなの言っていることを口にしたに過ぎないのだ。この科学の時代にちゃんとした教育を受けた人間には全くお笑い草としか思えないが、魔法がどうの、手をあてただけで病気が癒るのと、教育のないこの土地の人たちは信じこんでいると見える。ところで、セプティマス大伯父はハー

バードを出た男であって、今もイギリスにいるビショップ一族の間では学者で通っている人物だ。迷信なんぞにはハナもひっかけぬ人だったはずである。

あの古い家に帰り着いたのはもう黄昏時であった。大伯父は電気もガスも引いていなかったと見える。だが、蠟燭も石油ランプもあって、ランプにはまだ油が残っていた。ランプに火を入れてつましい食事を整え、食事を済ませてから、書斎の一隅を片付けてどうにか居心地よくすると、私はそのまま寝てしまった。

II

翌朝、いよいよ私は大掃除に取りかかった。書庫の黴だらけの本ばかりはどうにもならず、暖炉に盛大に火を燃やして、真夏のこととて暖を取る必要などこれっぽっちもなかったのだが、むっと内に籠る湿気を追い払うことにした。

やがて、下の階にはたきをかけ終り、床も綺麗に掃き出した。下の階の間取りは、まず書斎、その隣りの寝室、小さな台所、食料品置場、もともとは食堂のつもりで作られたのだろうが本や書類を積んであるところを見ると明らかに物置にもしていたらしい部屋、とこれだけである。私は階段を上って行ったが、すぐには二階の掃除にかからずに、そのまま、人間一人通るだけが精一杯の狭い梯子段からキューポラ＝丸屋根のすぐ下の屋根裏へ上ってみた。

屋根部屋は思ったより広く、人一人立って自由に動きまわるだけの空間が充分にあった。望遠鏡を据えてあるところを見ると、この部屋はどうやら天体観測に使っていたものであるらしい。ところで床だが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com